

シーボルトを育てた町長崎



長崎純心大学人文学部教授

みや さか まさ ひで
宮 坂 正 英

1954年 長野県茅野市生まれ

ドイツ・ヴュルツブルク大学第3系大学院博士課程修了

同大学文学博士 (Dr. Phil.)

現在 長崎純心大学人文学部教授、同大学大学院人間文化研究科教授 (併任)

専門：歴史社会学、日欧文化交渉史、シーボルト研究

ドイツ・シーボルト協会理事、長崎市シーボルト記念館専門員

はじめに

1992年に長崎の教育機関に奉職してから早いもので15年余りが過ぎた。この間教育の傍ら、シーボルトが書き残した膨大な文書資料の整理と、そこから読み取れる新たな知見を紹介することに勤めてきた。シーボルトの資料を読みながら常日頃から感じるのは、シーボルト自身の能力や見識もさることながら、シーボルトを受け入れ、シーボルトの日本研究に協力した長崎という町の存在の大きさである。長崎の人々が存在していなければ、シーボルトは短期間にあのような大きな研究成果を得ることはできなかったのではないかと痛切に感じている。

そこで本稿では、シーボルトがどのような長崎の人々との出会いによって日本に関する調査研究を行うことができたのか、具体的な事例を引きながら紹介してみたいと思う。

注目を集める

シーボルトの日本コレクション

1823（文政6）年8月11日、オランダ領東インド陸軍に軍医として勤務していた一人の若者が出島オランダ商館付き医師として長崎に赴任してきた。ドイツ人医師フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトである。シーボルトは、日本が西洋科学技術を導入し、近代化を果たした明治以降、西洋近代医学を日本に伝えた草分け的な存在として紹介されてきた。しかし、近年シーボルトはこうした業績以外にヨーロッパにおける日本の紹介者としての役割が見直され、シーボルトの日本調査や集めた日本コレクションの研究に注目が集まっている。

シーボルト自身の来日の最大の目的は、当時のヨーロッパではまだ実態がほとんど紹介されていなかった日本やその周辺地域を学術的に調査し、ヨーロッパで紹介することであったから、今日進められているシーボルトの日本に関する調査・収集活動の実態を明ら

かにすることは、まさにシーボルト自身が目指したものを180年余りの時間を経て明らかにすることになる。

シーボルトの2万点を超える収集品や日本情報を記録した文書資料がヨーロッパ各地の博物館や研究所、末裔宅などに所蔵されているが、個別的な調査・研究は進展しているものの、各機関の連携が行われていないので、シーボルトの日本調査の全容はなかなか明らかにならない。

日本人との協力関係によって 成り立ったシーボルトの日本調査

これだけ大規模な総合調査を6年という短期間で行ったシーボルトであるが、今日でも価値を失わない調査結果を生むことができたのはなぜなのだろうか。その鍵はシーボルトを取り巻く人々との協力関係にあった。一人の若い西洋人研究者が知識も情報も乏しい「未知の国」にやってきて、短期間に成果を収めるには他人の手を借りるしか方法はなかった。

幸い、シーボルトの日本調査はオランダ領東インド政庁の全面的な支援を得ていたため、潤沢な資金を研究に投入することができた。シーボルトはこの資金を使って薬剤師ハインリッヒ・ビュルガーと画家カール・ヒューベルト・ド・フィレネーフという有能な研究支援者を呼び寄せ、この二人の支援で日本調査を効率的に進めることができた。しかし、これだけで日本研究がうまくゆくわけではな

かった。シーボルトの日本研究が成功した決定的な要因はやはり日本側から多くの支援者を得ることができたことであろう。

そのなかでも、長崎在住の多くの日本人がシーボルトの研究の意図を正しく理解し、支援を惜しまなかったからであると確信している。つまり、シーボルトの求めた科学的手法による日本の実証的な調査研究を支援するだけの知識レベルを持つ日本人たちが長崎に数多く住んできたこと。さらに、シーボルトの長崎での日常生活を円滑かつ快適なものにする支援が得られたことも重要な要素として考えられる。

シーボルトは長崎で日本人に西洋近代科学を体系的に教えようとしたが、これと同時に長崎という当時の日本では稀有な学術文化都市で暮らすことによってはじめて日本研究家として成長することができたとみることができるのではないだろうか。

シーボルトの住んだ文化都市長崎

シーボルトが日本人とどのように交流したかについて具体的に述べる前に、6年余り暮らした町長崎がどのような町であったか、当時の記録をもとに辿ってみたい。

1826年に島商館長として赴任し、シーボルトが国外追放にあう1829年まで出島で生活を共にした G. F. メイラン（1785－1831）の著作「Nippon」に当時の長崎の町の様子が詳しく書かれている。

これによると、長崎は二連の山並みの末端

を形成している高地に建造された町で、人口は約6万人から7万人。当時の日本の都市としてはかなり大規模であった。町は整然としていて、道路は歩行者や籠による移動に適したように作られていたという。長崎の何より素晴らしいところは、犯罪が他国の港町に比べ極端に少なく、メイランによれば長崎は夜「世界で最も安心して眠れる町」であったという。

また、メイランは長崎の発展をアムステルダムの発展と比較しているところが興味深い。アムステルダムも長崎も零細な漁村から発達した大都市であるが、いずれも海外貿易を独占的に担う役割を与えられ発達している。メイランは長崎が対オランダ貿易の窓口として存在し続ける理由として、ヨーロッパで発展する人間的精神がもたらす新知識をオランダ人から吸収することができるからであり、その背景には、日本人の教養ある階層が芸術と学問に含まれるあらゆる分野に関心を持っているからであるとの的確に指摘している。

メイランは単に物財交換を行う貿易港としてみてだけでなく、ヨーロッパの精神活動から生まれる新知識の受け皿として長崎が重要な役割を果たしていることを見抜いていた。長崎はまさにヨーロッパからの新知識を受容し、その知識を日本社会に役立つ知識として日本各地から集まる学生たちに伝える教育の場としての機能を持っていたといえる。今でいう国際教育都市の性格を兼ね備えた日本有数の文化都市であったといえる。こうした都市にシーボルトがやってきたことが、短

期間に多くの理解者や支援者を得ることができた最大の要因であった。

最新の研究法を学んだ

自然科学者シーボルト

シーボルト来日の本来の目的は、単に出島のオランダ商館で医師として診療に当たることだけではなかった。職務上オランダ商館員の健康管理を担うことは当然のことではあったが、シーボルトがそれ以上に望んでいたのは、まだ西洋では実態がほとんど明らかにされていない日本という「未知の国」の自然や社会、文化などを科学的な手法を使って調査することであった。シーボルトは1823年に長崎に来航して1829年に国外追放に遭う6年間、常に診療活動や医学教育に携わったが、これは必ずしも彼の望んだものではなかったようである。このことは、1826年、商館長ステュラーに提出した書簡の下書きの中で、日本人やオランダ政府の求めに応じてあくまでも自発的に診療と医学教育を行ったのだと述べていることからこのことがわかる。

シーボルトが来日した1820年代のヨーロッパでは、科学がそれまで支配していたキリスト教的世界観から自立し、普遍的な価値として大きな社会変動の原動力となろうとしていた時代であった。特に自然科学の分野では、哲学的な研究から実証主義的な研究へと大きな転換が図られていた。シーボルトはまさに、実証主義的な手法、すなわち現地に出向いて観察や収集によって得られた知識や情報をも

とに未知の世界の実態を解き明かしてゆく方法を学んだ人物であった。

シーボルトは故郷のヴェルツブルクに住んでいた時代、ブラジルの調査に参加することを夢見ていた。シーボルトがヴェルツブルク大学の生理学教授イグナツ・デリンガーに師事したところ、デリンガーの薫陶を受けたマルティウスが大掛かりなアマゾンの探検を行い、また、デリンガー自身の息子もアフリカのニジェール川沿岸地方の探検調査を行っていた。これらの調査研究に自然科学者を志すシーボルトは大いに刺激されたことだろう。

当初インドネシアの自然科学調査をしようと考えていたシーボルトを日本研究へと向かわせたのはオランダ領東インド総督を勤めていたファン・デア・カペレンであった。学術に深い関心を抱いていたファン・デア・カペレンは、当時既に衰退に向かっていったオランダの対日貿易を再興するために、日本の総合的な学術調査を行う必要性を感じていた。シーボルトが医学のみならず、自然科学に精通した人物であることを見出したファン・デア・カペレンはオランダ政府の承認を得て、シーボルトの日本調査に多額の研究費を支払うことを許可した。日本の学術調査にこのような多額の研究資金が支払われたのは、後にも先にもシーボルトに対してのみであった。

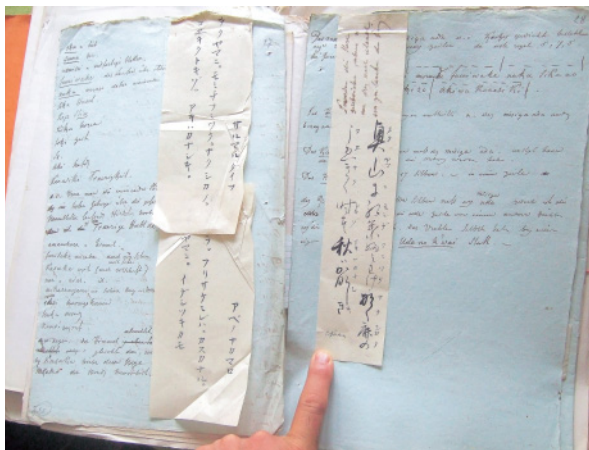
シーボルトの日本研究を支えた 吉雄権之助

シーボルトにとって幸いであったのはオランダ領東インド政庁の全面的な財政支援のみではなかった。決定的であったのは、来日直後から日本調査のために多くの日本人協力者を得ることができたことであった。そのなかの一人に、長年オランダ通詞として出島商館に出入りし、蘭日辞書の編纂にあたっていた吉雄権之助がいた。商館長ヘンドリック・ゾーフのもとで1812年から蘭日辞書「ズーフ・ハルマ」の編纂に協力していた吉雄権之助は、シーボルトの来日した1823年には引き続き辞書の編纂に携わっており、オランダ語と日本語に深く精通した人物であった。

シーボルトは来日直後から日本語に大変深い関心を示し、日本語に関する多くの資料を収集する傍ら、自らも日本語の学習を開始している。来日3年後の1826年、オランダ商館長の参府旅行に同行して向かった江戸で書き残したメモに、カタカナ全てと漢字が50余り読めると記してあるので、シーボルトが日本語を学習していたことは確かで、これを教えた一人が吉雄権之助であったと思われる。

1826年に来崎し、シーボルトのもとで蘭学を学ぶ前に権之助に入門した伊東昇廸は「権之助深ク蘭学ニ通シ文章法則等ノ議論ニ至テ蘭人モ多クハ此人ノ点竄ヲ受ク」（「西遊日記」）と記しているので、シーボルトも日本語研究に際して権之助から多くを学んだと考えられる。

ドイツ在住のシーボルトの末裔フォン・ブランデンシュタイン家に伝わるシーボルト関係文書のなかに未刊に終わった和歌に関する論考があるが、この中に和歌の見事な文法解説がみられる。シーボルト自身もラテン語初等学校や古典語学を中心とする教育を行うギムナジウム（大学予科）で学んでいるので、もちろん文法知識については相当のものであったろうが、短期間に日本語を品詞分解し、母国語の文法と比較するまでの知識はなかったと思われる。また当時オランダ語文法に精通したオランダ通詞といえば吉雄権之助をおいて他にない。おそらくシーボルトが和歌研究を行った際、これに全面的に協力したのは吉雄権之助であったことだろう。



シーボルト自筆草稿「和歌の詩歌」
ブランデンシュタイン家所蔵

また、権之助は長崎に遊学し蘭学を修めようと各地から集まった学生にオランダ語や蘭学の基礎を教えた。シーボルトの最も近い門人の一人であった高野長英もシーボルトに弟子入りする前に権之助のもとでオランダ語を学んでいたことが記録にある。

長英は岩手県水沢の出身で、兄が蘭学を学

ぶために江戸に出る際に、自らも蘭学を学びたいと親の反対を押し切って兄について江戸に上った。江戸の蘭学者吉田長叔のもとで蘭学を学ぼうと、兄弟子の駒留正見に「江戸での勉強1年はいわゆる畳の上の兵法、長崎の勉強半年は真剣勝負、この二つのいずれが西洋医学を会得する上での早道か」と長崎行きを勧められ、長崎行きを決意したという。

伊東昇廸や高野長英など、シーボルトの近い門弟として直接学んだ門人の多くがまず吉雄権之助らオランダ通詞のもとでオランダ語や蘭学の基礎を学び、その後にシーボルトをはじめとするオランダ商館に滞在する西洋人医師たちについてヨーロッパの医学知識を学んでいる。このことから、制度化されたものではないが、長崎には蘭学を学ぶためのある種の教育システムが出来上がっていたことが考えられる。

シーボルトはこのような蘭学の基礎教育を受けた日本人たちの支援を得ることによって、膨大で広範な学術調査を短期間に成し遂げることができたのであった。

シーボルトを支えた日本人女性 タキの生い立ち

今までシーボルトの学術調査に貢献した人物を事例に、長崎に蘭学を支える教育システムが存在したのではないかと述べてきたが、今度はシーボルトの日常生活を支えた人々について考えてみたい。

シーボルトは長崎での生活に大変満足して

おり、故郷のヴェルツブルクの母に自分があると20歳年取っていたら、ずっと日本で暮らしてもよいと考えるほど日本での生活は快適であると書き送っている。シーボルトを取り巻く日本人は皆好意的で、生活が円滑にゆくための配慮を怠らなかったようである。

なかでもシーボルトと出会い、生活を共にした引田屋抱えの遊女^{そのぎ}其扇の存在は大きかった。医療活動の傍ら、日本研究に熱中するシーボルトの出島オランダ商館での生活に安らぎや潤いを与えたことだろう。

では、引田屋抱えの遊女其扇、すなわちタキとはどのような人物だったのだろうか。古賀十二郎がタキの孫に当たる山脇たかに聴き取り調査を行った際の記録によると、タキは銅座在住の佐平ときよの間に生まれた。佐平、きよ夫婦には一男六女があり、タキは四女として生まれている。父佐平は野母崎出身で、材木商を営んでいたが何らかの理由で没落し、

経済的に困窮したと伝えられている。6人の娘のうちタキ以外に長女ツネも出島出入りの遊女としてシーボルトの助手ハインリッヒ・ビュルガーと出島で暮らし、一男をもうけている。このことから、佐平の一家は経済的な困窮から、やむなく二人の娘を遊女奉公に出したのではないかと推測される。

経済的に困窮した一家の娘が遊女奉公に出ることは、当時の長崎ではさほど珍しいことではなかったようである。江戸時代の長崎都市史に詳しい赤瀬浩氏は桶屋町の宗門改帳の調査をもとに、町内から一年に数名の女子が遊女として奉公に出ていたことを指摘しているから、おそらく佐平の一家も同じような境遇に陥り、娘を奉公に出したのではないかと推測される。

別離を前提とした「夫婦」

シーボルトがアジサイにヒドランゲア・オタクサ (Hydrangea Otakusa) という学名を与えたことは美談としてつとに有名であり、また国外追放にあった後にタキに宛てた書簡から、シーボルトがタキに深い愛情を注いでいたことはよくわかる。しかしこれ以外にシーボルトが帰国後、ヨーロッパでタキについて言及した資料はほとんど無いといってもよいだろう。このことから、シーボルトとおタクサは我々現代人が想像する夫婦とは異なる関係であったのではないかと推測される。

つまり、現代のように一度恋に落ちた男女が「永遠の愛の証」として生涯を共にすると



タキ肖像画
シーボルト著『日本』挿絵より

いう、男女間の結びつきのなかで「愛」を最重視する「ロマンチック・ラブ幻想」は、シーボルトとタキの生活の精神的支柱であったとは考えにくい。なぜなら、シーボルトは出島オランダ商館医であるから、数年後には他の商館員と同様帰国し、二人の「夫婦生活」は必ず終わりを迎える。つまり、あらかじめ離別を前提とした関係であったからである。

ではおタキはなぜ別離が運命付けられているシーボルトと暮らし、子供までもうけたのだろうか。もしタキがシーボルトと暮らすことによって、自身の後年の人生が悲惨なものになるのであれば、タキばかりでなく長崎の遊女たちは本当に出島へ通うことができたのだろうか。おタキがシーボルトと暮らすことを受け入れたのは、出島での暮らしが後年の生活にそれほどの大きな禍根とならないことが分かっていたからではないだろうか。

考えられる最大の理由は、江戸の庶民にとって再婚が比較的容易であったという社会的風潮である。とくに家産や家督を持たない庶民にとっては、結婚、離婚はそれほど困難なことではなかった。タキも家庭が経済的に困窮したことで遊女奉公に出たとすれば、当然守るべき財産はなかったと推測できる。実際タキはシーボルトとの離別後、ほどなくして本籠町の和三郎という人物と再婚を果たしている。和三郎がどのような人物であったのか記録が残されていないので詳しくは分からない。しかし、帰国したシーボルトにビュルガーが送った手紙に、柔和な職人であると書かれているので、和三郎もタキと同様にそれ

ほど裕福な人物ではなかったのではないだろうか。

このように、現代人からすればいささか不可解な「夫婦」関係ではあったが、シーボルトにとってはかけがえのない女性であり、またタキもシーボルトを支えるために献身的に身の回りの世話をしたようである。

周知のように、出島オランダ商館員は妻同伴で長崎に滞在することは禁止されており、その代わりに長崎の遊女らが身の回りの世話をする慣習があった。これは幕府の採る厳格な対外政策により生じるオランダ商館員の生活上の不都合を、長崎奉行所が緩和する方策であったとも解釈することもできるのではないだろうか。つまりオランダ商館員が出島という隔離された空間で生活するうえで必要な便宜を供与する一環として長崎の遊女が商館員たちと生活を共にすることを許可したと考えられ、タキが特別扱いを受けたわけではなかったのではないだろうか。

長崎は数百年間にわたり国内では唯一、限定的ではあるが市民が来日した外国人と直接接触することが許された町であった。滞在する外国人の滞在が円滑にゆくことは、長崎の対外貿易にとっても重要なことであり、その役割の一環を丸山を初めとする遊郭が担っていたのである。

今まで述べてきたように、シーボルトは公私にわたり長崎の住人であるオランダ通詞や門人、タキらの全面的な協力を得て、江戸時代に西洋人が行ったものとしては最大の日本研究調査を成し遂げることができた。

蘇れ「青雲の都」長崎

長崎は長期にわたり外国人との接触、交流の最先端の役割を担った町であり、特に西洋から流入する新知識を日本社会に有用なものに変換する編集機能が高度に発達した町であった。また西洋からの新知識を求めて長崎に集まる多くの若者を教育する重要な役割も担っていた。その役割を果たしたのは長崎の住民が自発的に作り上げた数多くの私塾であり、町全体がいわば学校のようなものであったと思われる。

鎖国政策による外国人との接触や情報の入手が厳しく統制された時代が終わると、このような長崎の歴史的な使命も終わり、明治政府の中央集権的な教育政策により新知識を求める若者たちはみな大都会に集まるようになった。

しかし、今日では都市部への人口集中や富の偏在が日本全体の深刻な社会問題として語られるようになり、地方分権政策によって地方都市が自立のために新たな方策を模索しなければならない時期にさしかかっている。その際に長崎が教育都市として数百年間重要な役割を負っていたという歴史的事実をもう一度思い起こし、再び知識欲旺盛な若者たちが集う「青雲の都」長崎を蘇らせることはできないか。長崎の未来像を描くとき、そんな方策を考えてみることも今日的な課題として重要ではないだろうか。